表紙：《下手の橋と戸入富士（たづ子命名）》1983年　1.《花盛りなのに》1985年　2.《戸入分校》1985年
3.《川遊び》1984年　4.《稲刈り》1980年　5.《戸入の初雪》1985年　6.《門入のお盆》1984年

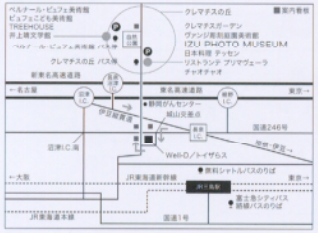
増山たづ子：すべて写真になる日まで

Tazuko Masuyama: *Until Everything Becomes a Photograph*

岐阜県徳山村で生まれ育った増山たづ子は戦争で夫を亡くした後、村で農業のかたわら民宿を営みながら暮らしていました。1957年、この静かな山村にダム計画が立ち上がり「皆が笑って過ごした天国のガイ（様）な所」と増山がいう徳山村も推進派と慎重派に二分されます。増山がそれまで使ったこともなかったカメラを手に取ったのは、徳山ダム計画が現実味を帯びてきた1977年、ちょうど60歳の時でした。「国が一度やろうと思ったことは、戦争もダムも必ずやる」と縄文時代から続くという村のミナシマイ（最後）を前に、せめて残せるものを残そうと愛機・ピッカリコニカで故郷の村をすみずみまで撮影して歩きました。そんな増山はたびたびマスコミにも取り上げられ「カメラばあちゃん」の愛称で知られるようになりました。村民運動会で初めて写真を撮影して以降、年金のほとんどを写真につぎ込みながら1987年の廃村後も通い、2006年に88歳で亡くなるまで消えゆく故郷を撮り続けました。あとには約10万カットのネガと600冊のアルバムが残されました。

2008年、計画から半世紀を経て徳山ダムは完成し、かつて村のあった場所は水の底へ沈みましたが、残された写真は在りし日の徳山村の姿を今に伝えてくれます。

本展では増山のアルバムや彼女自身の手で録音された村の音、村の植物でつくられた押し花を中心に展示いたします。



[無料シャトルバス時刻表]

（三島駅 ⇔ クレマチスの丘）

○行き［三島駅］北口（新幹線口）発

時		9	10	11	12	13	14	15	16	17
分	平日	40	40	40		00	00	00	00	00
	土・日・祝日	40	40	40		40	40	40	40	

○帰り［クレマチスの丘］発

時		10	11	12	13	14	15	16	17
分	平日	15	15	15	35	35	35	35	20*
	土・日・祝日	15	15		15	15	15	15	20

*は箱根湯本「箱根駅」経由のため所要時間は約45分です。

[増山たづ子関連年譜]

1917年　岐阜県徳山村（現・揖斐川町）戸入生まれ。
1936年　同じ村の増山徳治郎と結婚。のちに一女一男をもうける。
1945年　夫・徳治郎、ビルマのインパール作戦に動員され、行方不明となる。
1957年　徳山ダム計画が立ち上がる。
1973年　徳山ダムを盛り込んだ木曽川水系水資源開発基本計画決定。この頃村の会合などの録音を始める。
1977年　徳山ダム計画が本格化し、ピッカリコニカで写真を撮り始める。
1983年　徳山村を舞台にした映画「ふるさと」（監督：神山征二郎）に出演。最初の写真集『故郷』を出版。
1984年　エイボン功績賞を受賞。
1985年　離村。岐阜市内に転居。エッセイ集『ふるさとの転居通知』出版。
1987年　4月、徳山村廃村、藤橋村に編入。写真集『ありがとう徳山村』出版。
1997年　写真集『増山たづ子　徳山村写真全記録』出版。
2000年　徳山ダム本体工事着工。
2003年　岐阜地裁が事業認定取り消し訴訟を棄却。
2006年　3月、88歳で死去。9月、徳山ダムの試験湛水が始まり、旧徳山村集落跡地が水没。
2008年　5月、徳山ダム完成。

[関連イベント]

映画上映会

「ふるさと」（1983年、106分）
監督：神山征二郎　制作：こぶしプロダクション
出演：加藤嘉、長門裕之、樫山文枝、前田吟、樹木希林ほか
5月25日（日）午前11:15-午後1:00 / 午後2:15-4:00の2回上映
定員150名、無料、先着順（申込不要、当日有効の観覧券が必要です。）
会場：クレマチスの丘ホール（IZU PHOTO MUSEUM隣接特別会場）

トークイベント

本橋成一（写真家・映画監督）× 大石芳野（写真家）× 小原真史（当館研究員）
6月1日（日）午後2:30-4:00
定員50名、無料、申込先着順（当日有効の観覧券が必要です。お電話にてお申し込みください。055-989-8780）
会場：クレマチスアカデミーフォーラム（IZU PHOTO MUSEUM隣接特別会場）

[交通アクセス]

●お車の場合　東京方面より：東名裾野I.C.よりR246経由、沼津方面へ10km
名古屋方面より：東名沼津I.C.よりR246経由、御殿場方面へ5km

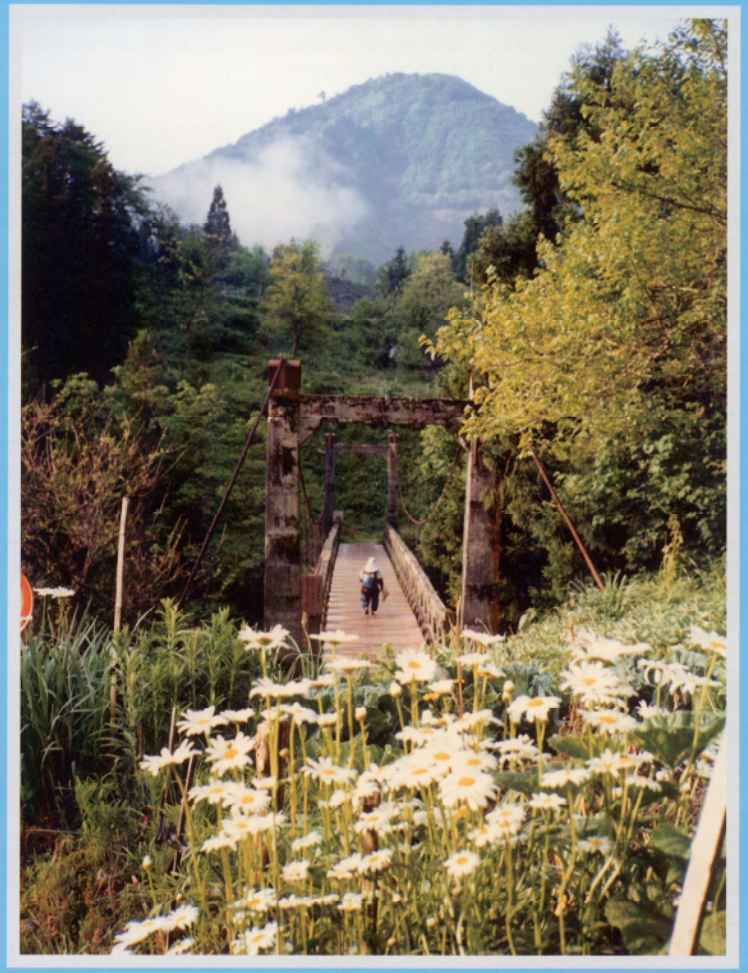
●電車の場合　JR東海道線「三島駅」下車、北口（新幹線口）発／3番乗り場、無料シャトルバスあり

411-0931 静岡県長泉町東野クレマチスの丘（スルガ平）347-1
Tel.055-989-8780　Fax.055-989-8783　www.izupho to-museum.jp

IZU PHOTO | MUSEUM

増山たづ子
すべて写真になる日まで

Tazuko Masuyama: *Until Everything Becomes a Photograph*



ダムに消えゆくカメラばあちゃんの故郷

2013年10月6日(日) — 2014年7月27日(日)

開館時間：10:00–18:00 *ご入館は、閉館の30分前まで
休館日：水曜日（4月30日と8月13日は開館）　入館料：大人800（700）円、高・大学生400（300）円、中学生以下無料 *（ ）内は、20名様以上の団体料金
主催：IZU PHOTO MUSEUM　静岡県長泉町東野クレマチスの丘（スルガ平）347-1　Tel.055-989-8780　Fax.055-989-8783　www.izuphoto-museum.jp
協力：増山たづ子の遺志を継ぐ館

IZU PHOTO | MUSEUM

徳山村案内図

[徳山村]

岐阜県揖斐郡徳山村は美濃の西北端揖斐川水系最上流部に位置していました。8つの集落、約500戸、1500人からなり、周囲を1200m級の山々に囲まれた多雨・豪雪地帯。1987年に旧藤橋村（現・揖斐川町）に編入され、地図からその名前が消えました。

[徳山ダム]

岩石や土砂を積み上げて造る日本最大級のロックフィル式多目的ダム。計画だけでいつまでたっても建設される気配のない「幻のダム」とも呼ばれました。長期の補償交渉を経て2000年に本体工事に着工。2008年に完成し、旧徳山村の門入集落を除く全ての集落部がダム湖（徳山湖）に水没しました。

[浮いてまう]

徳山村では村が「沈む」ことを「浮いてまう」と表現します。「水没」とは村の外から見た言葉であって、故郷を追い出される人々にとっては自分たちの生活が根を失って浮き上がってしまうことを意味しています。

《村誌しを見守る人々》1985年

[カメラばあちゃん]

増山は写真を撮り始める前、村の生活音を録音していました。カメラに興味を持ち始めたのは、ダム計画が現実味を帯びてきた頃。当初はフィルムの入れ方すら知りませんでした。愛機・ピッカリコニカと首に巻いた水色のタオルはトレードマークとなりました。増山はこのカメラを何度も修理したり買い替えたりしながら使い続けました。
（写真：増山たづ子アルバムより）

[ピッカリコニカ]

1975年にコニカから発売されたピッカリコニカはコンパクトカメラの先駆け機種。軽くてストロボも内蔵していたこのカメラは大ヒット商品となり、カメラの大衆化に貢献しました。増山が営む民宿を訪れた客に「素人の自分でも写せるカメラはないか」と相談したところ「猫がけっころがしても写る」とこのカメラを薦められたといいます。増山はピッカリコニカの開発者・内田康男氏と長く親交を結びました。

[友だちの木]

増山の住む戸入（とにゅう）集落の川縁に生えていた楢の老木。川で洗濯をする増山のよき話し相手でした。いつも「ワシを見よ、大水で根を洗われ、台風が来て枝を折られてもこうして立っているぞ」と慰めてくれたといいます。増山はこの木が生きながら水に沈むのかと心配しましたが、岐阜市に移転する頃に枯れてしまいました。

《友だちの木》1984年

カメラばあちゃんの言葉

「イラ（私）もいくら日本一のダムになっても、アガデ（自分）の大事な故郷がダムになっては、かなわん、と思い、真剣にはじめは反対しました。だけど国の力にはかないません。国が一度やろうと思ったことは、戦争もダムも必ずやるから、大河に蟻がさからうガイ（様）なものです」

「ビルマインパール作戦で行方不明になった夫が帰って来たら、写真だけ残った、大事な故郷を見てどう思うだろうなー」

「幾百年、栄えた我が村も、時の流れにはさからえず、昔の光、いまいずこ」

加瀬亮（俳優）

増山たづ子さんは、徳山村が消えゆく前に、まるごと写真の中に引越しさせ、時間の制限からはなれて村をいつでも訪れることのできる場所にしたように思います。途方もない悲しみや怒りが透明なレンズをさらに磨いたのか、写された光景がただひたすらに明るく、優しいのに強く胸をうたれました。

神山征二郎（映画監督）

増山さんの写真はいつも被写体の真正面から撮られている。戦争で夫を、ダムで故郷を奪われた者の心の叫び声が私には聞こえてきた。

高村薫（小説家）

一つの村から人の暮らしが消えることの衝撃が、いまも増山さんの写真をぴんと張りつめさせている。私は在りし日の徳山村を知らないが、自分の生きてきた時代への大きな懐疑が押し寄せてくる。

志賀理江子（写真家）

雪の中でヒマワリが咲いていました。世の中には不思議な事がたくさんあるとたづ子さんは言う。彼女の全身全霊の抵抗がここにあって、ああ、だから人々も花も山も家も、お金の交渉にきた銀行の人でさえも、写真の中に優しく写り、等価なのだと思いました。

ジャン・ユンカーマン（映画監督）

この写真の鮮やかさは増山たづ子さんの村と村人への深い愛から生まれたのでしょう。カメラのレンズですべてを自分の孫のように撫でているような感じがします。見事な写真の中で、なくなった村、いなくなった人たちがまだ生き続けています。

樹木希林（俳優）

30年前の徳山村での「ふるさと」のロケ。監督の若かったこと。あたしだって子供と昼寝する嫁の役だったもの。澄んだ水にしか住めないイワナの塩焼き。あれ以来川魚食べられるようになったの。今日移転先の一つ本巣郡文殊の徳山団地に行ってみた。まっ昼間なのに人の気配がしない補償金で建てた家々。あの頃急造成で地盤沈下やら何やらふんだりけったりだったわねえ。なのにたづ子さんの写真からは愚痴が見えない―ただなつかしいの。（2013年6月26日）

荒木経惟（写真家）

写真のための写真、美術のための写真へと、進行している現在、こーゆー、これこそ「写真」を展示するIZU PHOTO MUSEUMは☆☆☆　素晴らしい増山たづ子おばあちゃんにアラキッス！

赤坂憲雄（民俗学者）

みんなが笑ってる、人も、鳥も獣も、草も木も山も。地図のうえから消され、やがて水底に沈められた故郷が、いまも笑ってる。来たるべき不在のときに向けて組織された、記憶をめぐる戦いは、きっと受け継がれる。徳山から、たとえば福島へ。あの笑いとともに。

森達也（作家、映画監督）

写真は情報量が圧倒的に少ない。ズームもパンもできない。ナレーションもテロップも音楽もない。欠落している。だから強い。見る側が想うからだ。見ながら増山たづ子のことを想う。撮る瞬間の表情を想い、どんな人なのかと想う。そして嬉しくなる。明日は今日より優しくなれそうな気がする。

山口崇（俳優、民話研究家）

たづ子さんは生きとし生けるもの全てが友だちだった。毎朝カメラを手に巡回？に出かけ、山河草木人動物と行き交うたびに大きな声で「お早う元気か」とあいさつしてカメラにおさめていた。あのお声が懐かしい。

平方浩介（甥）

人は皆、喜怒哀楽の情を顔や仕草で表しながら生きている。被写体となったこれらの人達と彼女と共に生きた私には、彼女に向けてくれた彼らの笑顔をただ純な喜と楽の情のみにとらえてほしくない想いがある。

開沼博（社会学者）

「忘れてはいけない」と簡単に言うが、放っておいたら時代とともに消え去るものを忘れないためにはどうすればいいのか。増山たづ子の写真に遺された人々の笑顔が、その一つの答えを教えてくれた。